

ジャーナリスト・映画監督

三上 智恵さん

沖縄のテレビ局でアナウンサー・キャスターとして活躍され、沖縄の基地問題に深く切り込んだ初監督作品『標的の村』で数々の映画賞を受賞されたジャーナリスト・映画監督の三上智恵さんにお話を伺いました。現在も自主上映会が続く『標的の村』と最新作『戦場ぬ止み（いくさばぬとどうみ）』の見どころ、マスメディアの存在意義、沖縄問題の本質、弁護士に期待することなど幅広く語っていただきました。

（聞き手・構成：小峯 健介，西川達也）



——プロフィールによると東京都のご出身なのですね。

東京で生まれましたけれど、あまり東京に住んだ経験もないので、自分が東京出身という感じは薄いんです。父の仕事の都合で転勤ばかりしていたので。

でも、1つの場所にこだわって一番長く住んでいるのは沖縄です。もう二十何年沖縄に住んでいますので、一番ゆかりの土地はと聞かれれば、沖縄と答えています。

——沖縄に興味を惹かれたきっかけは何でしょうか。

小さいときに父の仕事の関係でたまたま沖縄を訪れたときに、カルチャーショックを受けて、その時点でアメリカとかいろいろな国に住んだ経験もあったんですけども、どこの国よりも何か衝撃を受けた場所だったんです

——小さいころから、将来的には沖縄に住んで沖縄で仕事をしようという気持ちがあったのでしょうか。

そうですね。大学卒業のときに各局のアナウンサー試験を受けて、東京の局も大阪の局も内定はもらうんですが、実は一番行きたかったのは沖縄の局でした。ただ、その当時沖縄には民放は2局しかなく、私の卒業の年度に採用はなかったんですよ。それで、大阪の毎日放送に入ったんです。

——その後、1995年に琉球朝日放送が開局になった際に移られたのですね。

はい。

——当初から、アナウンサーとしてだけでなく、番組制作にも携わりたいというお気持ちはあったのでしょうか。

小さいときから何か物を作るのが大好きでした。だから、しゃべるだけというよりは、自分で企画して取材してまとめて、最後に自分でナレーションを入れるのはとても面白かったんです。物づくりがしたかったんですよ。

小さい局に行くと、何でも1人でやらないといけないので、それをやってみたかったんですね。これが、沖縄に移った理由の一つです。自分の企画で、取材も企画もインタビューも構成も、最後の文字スーパーから音楽まで何でもできたので、それは人がいなくて大変というより私は楽しかったですね。

——沖縄の抱える基地問題に関心を持つようになったきっかけは何だったのでしょうか。

きっかけもなにも、沖縄でニュースキャスターをやっていると、ほとんど毎日トップニュースが基地問題なんです。ここに住んでいれば基地問題って興味があるとかないとかというレベルじゃないんですよ。

——『標的の村』のドキュメンタリーを作るきっかけは何だったのでしょうか。

ニュース番組って、1本のニュースをだいたい50秒から1分ぐらいの形で毎日たくさん数をこなすんです。1年のうち7割ぐらいは基地問題がトップニュースなのですが、そのうちの半分ぐらいの時間は昨日も伝えたことで使ってしまい、今日の新しい部分って20～30秒しか入れられないんですよね。そんな形ではとてもじゃないけれども、毎日動いている基地問題を伝えられないので、だから何かに特化して特集を作りたいと思いました。

——東村・高江のオスプレイの着陸帯（ヘリパッド）の建設問題を取り上げたのはなぜですか。

『標的の村』で主な舞台となっている沖縄本島北部の東村・高江に関しては、何でみんなが取材しなかったのか不思議なんですけど、私たちしかやってなかったのです。

辺野古への基地移設については頻繁に取り上げられるのですが、1996年の普天間基地を返還してどこかに移設するという日米合意（SACO）と同時に、北部訓練場が返還されて、ヘリポートを移設するというのも合意されたんです。移設先がどこかはもちろん当時はまだ明記もされていませんでしたし、高江を囲むことになるとはそのとき誰も思わないからあまり問題になかったんですが、実は辺野古と高江のことは同時に決まっている。両方とも移設という名前のごまかしで、オスプレイを持ってくる新しい配備先と訓練先というものを目論んでいたことがだんだん分かってくるわけですね。だから、辺野古のことをやっていたら、自然に高江のことをやらざるを得なくなると私は思います。

——『標的の村』のドキュメンタリーが放送されてどのような反響がありましたか。

最初にテレビ朝日系列のテレメンタリーという枠で30分の全国放送版が放映されたときには、大変な衝撃があったという感想をもらいました。でも各局で曜日や時間帯が違ってあまり告知もできないし、放送が深夜だったり明け方だったりして、衝撃が強いと言って

も見た人の数が圧倒的に少なかったんですね。

最初はオスプレイを止めるためにドキュメンタリーを作りました。日本中の人オスプレイに反対してくれるんじゃないかと期待して作ったんですよね。だけど、県民が命懸けで台風の中で普天間基地を封鎖するというシーンが放送されても結局オスプレイは飛んできてしまう。だから、オスプレイが飛来した朝はもう本当に絶望して、自分の中でものすごく敗北感がありました。同じ仕事を続けていけないなと思いました。

——『標的の村』を映画化されたのはどのような理由からでしょうか。

しばらくは、つらすぎて素材も見たくないという状態でした。ただ、普天間基地が封鎖されたということは、不思議なことにとこの局も伝えなかったんですよ。わあわあやっていたという感じをニュースで見た人は多いんですが、普天間基地を完全封鎖したとか、それが前代未聞の初めての出来事であったとかというふうに、理解して伝えていたところが1つもなくて、うちうちの系列のテレビ朝日しかやってなかったということが後で分かりました。

それならまとめて放送した方がいいんじゃないかと言われました。私がやるのは絶対嫌だな、見たくもないなと思いつつも、誰もやってないんだったらと思って、泣きながら1時間にまとめたんですね。

1時間にまとめたものは沖縄ローカルでしか放送されませんでしたけど、それを見た人が動画投稿サイトに上げちゃったんですね。本当はいけないことなんですけど、その上げたものがどんどん口コミで広がって、あっという間に3万アクセスとかがあったんですよ。

——その時にはどのような反応がありましたか。

動画投稿サイトで見た人たちからたくさんメールとか来て、その内容が、「とてもいいものを作ったんですね」ではなくて、「何でこんな大事なことを放送しないんですか」というほとんど怒りだったんですよ。「ここまでのことを取材していながら役割を果たしていないんじゃないですか」とか、「どうして全国ネットにしてくれないんですか」とか、「知る必要があるのに隠され

ている気がします」とか、何か居ても立ってもいられない怒りみたいなものがいっぱい来ました。

その中で私が映画に踏み切る大きなきっかけになったのは、「これ以上知らないということで加害者にされるのはまっぴらです」という意見でした。自分の問題だと思ってくれる人が多くなっている今だったら、何とかして全国に届けたいと思って、どうやったら映画にできるのかな、みたいなことを真剣に考え始めたんです。

——最新作の『戦場ぬ止み（いくさばぬとどうみ）』はどのような思いで制作されたのでしょうか。また、見どころについてお聞かせください。

沖縄が基地問題で苦しんでいるということはたぶん日本中の大人が知っていて、辺野古というキーワードも知ってはいるんですけども、そこでわあわあ反対している人がいるイメージしかなくて、でも実は賛成している人もいるんでしょう？というぐらいの興味しか持ってもらえてないと思うんですね。

だから、本当にどういう人たちが、なぜ反対をしているのか、これはいったいどういう問題なのか。決して沖縄の負担が大きいから、ほかのところも荷物を持ってくださいと言っているだけではないんですよ。

沖縄は、ベトナム戦争もそうですけれども、土地も貸して、基地周辺で働いている日本人の労働力も提供して、ベトナムの人たちを無差別に殺戮していくのを止めないどころか、手伝ってきたわけですね。でも多くの日本人は、日本は70年間戦争をしてこなかったと、私たちから見ればずっとぼけたことを言っているなと思います。日本のお金でアメリカの殺戮を支えたのに実感として持てないようにされてきたと思います。

政府は日本国民を多くの意味で騙している。「戦争をしてこなかった」という言説ももちろんそうですが、基地というのは訓練をする場所であるというふうに教えてきている。でも、基地というのは出撃拠点なんですね。戦争に使うから置いてあるのであって、訓練をしたくて置いているわけではない。

だから、兵隊がたまに外に出てきて悪さをするから嫌だと言っているのではなくて、人を殺しに行く場所

として機能するし、そうしたら返す刀で攻撃される、標的になるから嫌なんですよ。

でも、それはアメリカがやっている戦争で、日本が攻撃されるわけではないと薄ぼんやり考えている国民が、沖縄の危機感を全然共有してくれてなかったんですね。基地というのは出撃拠点であるし、だからこそ持っていてはいけないんです。ほかの国から恨みを買うような国際的な動きをしてはいけないんです。

『戦場ぬ止み』を見ていただいたら分かると思うんですが、辺野古には、強襲揚陸艦という港もないところに襲いかかりにくい艦艇が、オスプレイを載せて出港するための軍港が造られようとしているんです。これはとてもじゃないけれども、普天間代替施設とは言えない。沖縄の負担を軽くするために移転はやむを得ないから、日本国民から税金を出しましょうという話だったんですが、徐々にそれは欺瞞だということが分かってきて今に至っているわけですね。

本当に考えてみてほしいんですけど、強襲揚陸艦が出ていくような軍港と、それから核兵器も貯蔵されていたといわれる弾薬庫と、2本の滑走路を持つ基地を、沖縄に日本のお金で造るんですよ。そうしたら、ほかの国は何と思うか。ここから出てきたものによって自分の家族が殺されたりしたら、それは辺野古がある大浦湾を攻撃するだけじゃなくて、日本人全員をターゲットにしたいと思いますよね。

だから、辺野古の問題は普天間基地をどこに移せばいいのかなんていうレベルの話ではもうなくなっちゃっているんですよ。ということを、辺野古の基地反対運動ってどんなものなんだろうなという入り口でもいいから見てもらって、とんでもない国になってしまっているというところまで知らせなければいけないというのが、この映画の内容なんです。

——『標的の村』と『戦場ぬ止み』は、基本的には基地反対派の方々の視点で描かれていますが、機動隊や海上保安庁も完全な悪役ではなくて、人間である沖縄県民として描かれていますね。

映画の中では、すごく抽象的な言い方をすると、沖縄の人たちが民主主義にのっとなってどんなに民意を示

そうとも、権力側が新しい基地を押し付けてこようとしているわけですね。

だけど、直接向き合って押し付けているように見えるのは、海上保安庁の職員であったり沖縄県警や機動隊であったり。でも、彼らは本当は基地を造りたい本体ではないんですけれども、職務上、反対運動を抑え込んで、実際は工事を進める実力行使をしてしまっているんですね。反対している側からしても、彼らを責めたって仕方がないというのは百も承知なんです。でも百も承知だけれども、目の前でやっぱり暴力的に押さえつけられれば、頭にくるし痛いし相手のことを憎みたくもなる。

だから、権力側が用意した構図にまんまと引っ掛かって相手を憎んで、海保も反対運動を憎むというふうに感情的には持っていかれるんですけれども、相手も人間だし別にともとも憎み合う必要はない間柄なんだよねとか、本当に基地を造りたい人はここにいない人なんだよねということを見ている人にも気付いてもらおうと、じゃあ、そうするといったい本当に造りたい人って誰なんだろう？と思うじゃないですか。

——でも、映画の中には基地を造ろうとしている張本人は出てこない。

この映画は反対運動の人しか描いてない、基地を造りたい人が出てこないと言って何かもやもやするわけですよ、見ている人は。そのもやもやしている人は、誰かの顔を見て、「この人が造りたいんだ。悪いなこの人」と思いたいんだけど…。

でも、その顔は人によって想定しているものはたぶん違うし、例えば私が防衛大臣の顔を写し出して、この防衛大臣が悪いのか、と言って観客に溜飲を下げてほしくないんですよ。だって、防衛大臣1人が造りたいわけじゃないですよね。首相の顔とかを出したら、このやろうと思いたいけど、でも首相でもないですよ。

あなたのところの知事が辺野古移設を承認したじゃない、あの知事が悪かったんじゃないのみたいな、そういう落としどころを見る人は欲するんですけど、私は出さないんですよ。そのどれでもないと思うんですよ。

たぶん基地を押しつける側の1つの答えは、安全保障なんて考えてみたこともなく、投票行動に結び付けたこともない一般のその他大勢の有権者ですね。

——琉球朝日放送でアナウンサーをされていたご経験も踏まえて、マスメディアの存在意義や果たすべき役割についてどのようにお考えでしょうか。

それはもう揺るぎない答えですけれども、権力の監視です。

権力というのは必ず暴走するものですよね。それは歴史が証明しているわけですから、暴走する権力を止めるのは大衆の力をもって止めるしかない。マスコミが止めるわけじゃないんですよ。大衆がそれを止めるために、マスメディアはその情報を大衆に問うていく、世論をつくり上げていくことでしか権力の暴走は止められない。

——沖縄県民の民意というのは国政に十分に反映されていないように感じますが、どうすればこれが改善されるとお考えでしょうか。

民意が伝わっていないって言いますが、昨年の県知事選や衆院選の小選挙区などの結果を見ても、沖縄県民は民意を示す機会のことごとく示してきている。民意を示すべく用意されてない機会までつくって、県民大会だとか何だかんだやっているわけですよ。でもそれでも全然知らない、伝わらないっていうのは、知ろうとしていないからではないでしょうか。

沖縄の問題をよく知らないけど、知らなくていいんだと思っているのは明らかに間違いです。人の痛みを分からなきやいけないとか道徳的な話ではもうないですよ。たぶん10年ぐらい前は「人にたくさんの荷物を背負わせて知らんぷりするのとは道徳的によくない」ということで、沖縄の負担についてみんなで考えようみたいな、お利口さんな方向のシンポジウムでよかったかもしれない。

けど今は、日本が戦争をする国になる、その決定打となるのが辺野古の基地建設であって、これを日本の税金で造るのであれば、あなたの息子も徴兵されるだろうし、あなたの住んでいるところが標的になるでし

よう。無関心で来たからここまでの日本になってしまったじゃないですか。だから沖縄のことが伝わらないとかって言っている場合ではない。

—— 今後の活動予定について教えてください。

辺野古の状況は続いていくので、それについてももちろん今もカメラを持って取材に行っています。また、宮古、八重山に配備されるミサイル部隊のことが最も喫緊の課題だと思っています。ただ、もう1つ、映画として次なにを作るべきかどうかっていったら、ちょっとまだ分からないんですね。

私がこの仕事をやっている一切の原動力は、二度と沖縄を戦場にしないということなんです。二度と沖縄を戦場にしないために、この辺野古のことを18年も19年もやっているんです。

私は映画監督になりたいくて映画を作っているわけではないんですよ。沖縄を戦場にしないためにどうしたらいいかということを考えると、一般の人たちの意識を変えない限り政治は変わらないですよ。国民のレベル以上の政治家は出てこないわけです。だから結局、国民の意識を変えていくために映画という手段に訴えているだけなんです。

—— 最後に、当会会員に何かメッセージがありましたらお願いします。

沖縄のことを考える弁護士さんって結構たくさんいらっしゃるって、沖縄に弁護士会として来たり、イベントを組んでくれたりというのを知ってはいるんですけども、何かもっと沖縄だけではなくて、国が人権を奪っているという事象に対して取り組んでくれる人が増えればいいなと思います。

人権の問題って、それが障がい者の問題であっても、国策の問題であっても何でもそうですけど、人権が奪われていく構図ってみんな同じですよ。あっちこっちで人権が損なわれているというのは、もう足元が崩れていっているようなものです。

いじめの問題だってそうです。いじめが何で起きるのかというのは、戦争が何で起きるのかと同じだと思うんですよ。人間の集団というものが暴力的になって

いくわけですよ。集団の中で凶暴性を持つ人がいるときに、矛先が自分に来ることを恐れて大多数が黙ってしまう。会社の中でもそうですよね。この会社の中のこの方針はよくないと思っても、今、自分が言うことはマイナスだと思って黙ってしまう。それはいじめを見過ごしているのとほとんど同じ集団心理ですよ。

だから、身の回りの人権がないがしろにされている事例に対して、弁護士じゃなくても一人一人がどう立ち向かうかということが、結局、その後、大きな不幸につながらないかどうかの瀬戸際なんだろうと思うんですよ。だから、足元から崩れていく、あらゆる人権が損なわれている局面を見過ごすということが、一番怖いと思います。

そのためには、戦っている姿を見せるということが一番だと思うんですよ。権力や不誠実な事柄と法律を武器にして戦うんだよというのを見せられるのって、弁護士の皆さんの仕事ですよ。

皆さんは大きい敵といろいろな事例で戦っていて、たぶんそれをお子さんとか周りの人が見ていて、ああ、こういうふうにしたら諦めなくていいんだ、泣き寝入りしなくていいんだ、戦い方があるんだって思うことが、次に見て見ぬふりをしない人をつくるんだと思うんですね。だからその戦いは負けても、戦っている姿を見せたり共有することで次の敵には戦えるかもしれないという、細かいことの積み重ねですけど、それが財産だと思うんですよ。

—— ありがとうございました。

プロフィール みかみ・ちえ

ジャーナリスト、映画監督。東京生まれ。大学卒業後の1987年、毎日放送にアナウンサーとして入社。1995年、琉球朝日放送(QAB)の開局と共に沖縄に移り住む。夕方のローカルワイドニュース「ステーションQ」のメインキャスターを務めながら、「海にすわる〜沖縄・辺野古 反基地600日の闘い」「1945〜島は戦場だった オキナワ365日」「英霊が犬死か〜沖縄から問う靖国裁判」など多数の番組を制作。2010年には、女性放送者懇談会 放送ウーマン賞を受賞。初監督映画「標的の村〜国に訴えられた沖縄・高江の住民たち〜」は、ギャラクシー賞テレビ部門優秀賞、キネマ旬報文化映画部門1位、山形国際ドキュメンタリー映画祭監督協会賞・市民賞ダブル受賞など17の賞を獲得。これまでおよそ600回の自主上映活動が続いている。現在、次回作の準備を進めている。